

イヤ、相変わらず珍しがってばかりいますが、こう荘嚴なものになつてくると、プラス有り難さというところが本音です。

この博物館を見疲れて、一済みのベンチに腰をかけ、ペンを走らせてメモしているといつの間にか手先が暗くなるほどの人垣が私の書く字を見おろしている。たて書きに草書仮名まじりで書く字が、英語にしてもヒンズー語にして横書き専門の彼らからは珍しかったらしい。

ヒンズーとささやいているうちに、若い男の声で、ノオ・ジャバニーズ——という、ハハアそうかと散って行つてくれた。私はここでは外国人であつたのだ。

博物館の庭といわず、バス・自動車・牛車の通る表通りでも、人道の街路樹でも、ちよろちよるとリスが走り廻る。日本の椋鳥せうとみたいな洞の丸い黒と白とグレーの中形の鳥もいる。誰も追う者もない——というより見ている者もないという方が当たっている。

ハハアまた珍しがつてゐるナ——と思うでしょう、それでもよろしい。ここを出て、まぶしい陽光の下をすじ向かいの鹿野苑すなわち初転法輪寺の境内へ入つてゆく。美しい美しい三分の草一本生えていない広大な地域。まさに淨域といえるもので、わずかばかり隅の方に大木があつて、あとは葉が花のように赤く彩つている灌木が少しある程度。門に入つてすぐ古城の左よりに、レンガ積み崩れた戒壇風のもの刻石レリーフの美しい柱の残骸が、崩壊状態のままに保存されて青い苔さえ生えている。

この高低のあるレンガ積み建築の跡はおそらく釈尊当時のものではなく、後世の造建によるものであろうが、この現状は旧友五比丘に接見され、正當しやうたうを得られて自信に溢れた釈尊の姿を想起するに足るものがあった。静かに仏座の辺りと思われるレンガに手をふれると、俗物の手をはねのけるように少々熱かつたのに驚いた。

この境内にあつたかつたの建造物がどのくらい大きなものであつたか、この辺りの通路はみなまっ赤な土なのかと思うほどレンガの粉碎したものを敷きつめているし、そして今なお石仏の断片などが時々掘り出されるといふ。

この向かい側の右表寄りにジャイナ教の寺院がひとつあり、ひとすじの小径を隔ててすぐ左に大きい釜を二つ重ねたようなタメリ塔と呼ぶアシヨカ王遺産という巨塔がある。もとはこの釜のようなのがひとつであつたのを後世さらに一層重ねたものだ、とガイド氏はいつていた。ま近く寄つてみると一定の間隔をおいて高いところに仏龕ぶつゑんがいくつか作られていたが、塔芯も全部レンガ積みで室のようなものはない由、もつとも出入口がひとつもないのだからそうであろう。

さらにその奥、全境内の右端によつて、やはりダルマ・パーラ氏が発起して建てたムラガンダクチビハーラすなわち初転法輪寺がある。この寺は通称日本寺ともいつている。中へ入つてみると明るく陽ざしの入る近代的寺院で、内陣になる所が外形塔のような作りで、外陣から向拝へと続くが、向拝は一見廻廊のように長く前方へ延び、その廻廊の中ほどに日本仏教連合会寄贈の金色塗りの梵鐘が吊つてある。といつてもふだんは吊つていないらしい。われわれも第二日めの時には吊つてあつて、この最初の時にはなかつたのである。

そこから礼堂へ入ると、釈尊像のある須弥壇の方を除く三方の壁面一ぱいに、日本現代仏画界の耆宿せきこく野生司香雪先生が、六年余りをここに滞留し畢生ひせいの努力をもつて描かれた世尊生涯の重なる事項の絵があり、終わりに日英両文で「この絵は大菩提会より日本政府を通じて頼まれ、費用は英人の仏教徒P・L・プロートン氏の寄附に始まり、先生自身を兩期にはセイロンその他の地方に絵を作つて売りにゆき、残余は日本政府と日本およびインドの仏教信徒喜捨の淨資によつて完成したもの。これはひとえに仏陀の広大無辺の慈恩の賜と合掌礼拝する次第である」と記し、「皇紀二千五百九十年、野生司香雪併記」としてある。

(つづく)